



No.58 2020.6.

明石市コミュニティ・スクールだより

人をつなぎ 未来をつなぐ 明石のコミュニティ・スクール

## コミコミスクスク

KOMIKOMISUKUSUKU

明石市教育委員会事務局学校教育課

### 未来の教室オンラインキャラバンキックオフ DAY

～ウィズコロナ時代の学び～

6月5日(金)19時よりYouTubeライブで、「ウィズコロナの時代の学び」をテーマに、「未来の教室オンラインキャラバン」キックオフイベントが開催されました。初めてのオンラインでの開催にもかかわらず、500名を超える参加者があったそうです。

参加する側としてはこうした研修・講演会の情報さえあれば、学校・教育行政関係者等だけでなく、保護者、一般市民の方など幅広い参加が可能になり、しかもわざわざ出かけていかなくてもいいという魅力とメリットがあります。(しかも今回は無料)

「社会に開かれた教育課程」を実現し、これからの時代の学びを創っていくためには、“教職員だけが”ではなく、積極的にオープンにしていただいてもが参加でき、対話が生まれる研修会等を仕掛けていく必要があるのだらうなと思いました。

本研修会に参加しながら、地域でこうした研修・対話の場を創っていけたら「いい学校づくり＝いいまちづくり」が進むのではと思いました。コミュニティ・スクールが目指しているところはこうした対話を通して、ゴールを共有する中で当事者意識を高め、協働性を高めていくことだと再認識することができました。

そうした意味でZoom等Web会議は、対話・研修の在り方を変える可能性を秘めており、場所に関係なくリアルタイムに対話ができる強みを生かした敷居の低い対話・研修にチャレンジしていけたらと思っています。そんなチャレンジの輪が広がっていけばいいなと。

時代に即して、進化しながら、新たな学びを創っていくために、教職員だけでなく、保護者・市民・学生等と一緒に学び対話を重ね協働していくことが必要です。そんな対話を始められるかどうか、一歩目を踏み出せるかどうか、そんな分岐点が今なのではと思います。

登壇者の対話の方は、「ウィズコロナ時代の学び」・「Society5.0時代の学び」とどんどんと深まってきました。日本の学校が抜け出せないでいる「Society3.0時代の学校」の仕組から脱却し、新たな学びの仕組を創っていく上で“EdTech”等を活用しながら、これからの時代の教育のビジョンを描き、学びをデザインしていくことの大切さが語られたのではと思っています。



Peatix 紹介画面参照

「未来の教室」とは2018年よりスタートした経済産業省による教育関連事業です。令和時代の教育改革に向け、過去の成功体験に囚われない「時代の変化に合わせた新しい教育のあり方」を産官学が連携した取組。(経済産業省説明参照)



チャットには質問・意見・感想がリアルタイムで反映されていきます。これも Web 会議のおもしろさですね。

熊本市の実践はまさに将来を見据えたビジョンがすでに描かれており、今回のコロナ禍で加速されただけといった印象を受けました。また奈良の実践は将来へのビジョンは描いていたが、準備等が不十分なまま、今回のコロナ禍に突入し、「走りながら考えた」という言葉がぴったりでした。

熊本市と奈良に共通していることは、これまでとは違う未来を具体的にみていた、みようとしていたということではないかと思います。未来をイメージしながら、ビジョンを描くために対話が繰り返されたのだと想像します。その中で教育を変えるという具体的なイメージが湧いてきたのだと思います。「思いつきといたら悪いイメージをもつやつがほとんどや。いつも頭の中で考えているからふと湧いてくるんや。何にも考えてないやつには思いつかへん」と昔上司にいわれたことがふと頭に浮かびました。「想像するから創造できる」ということを大切にしていきたいなと改めて感じました。そして、2 時間 30 分近くの研修の中で何よりも印象に残ったのは遠藤熊本市教育長の“オンラインとリアルとのハイブリット”の話の中で「熊本市立オンライン小学校・中学校」の話でした。そして「もちろんもうちょっとお洒落な(かっこいい)名前にしますけど」には教育長の本気度を感じました。“オンラインとリアルとのハイブリット”といった言葉、“同期・非同期の学習”といった言葉が普通に使われ始めている地域があるのだなと改めて驚かされました。



(「未来の教室オンラインキャラバンキックオフ Day」終了画面参照)

本イベントの様子は近日中に YouTube で公開されるようなので、是非みていただけたらと思います。

また、第 2 回「未来の教室オンラインキャラバン」が 6 月 27 日に予定されているそうです。一度リアルタイムで参加されてみるのもいかがですか。

(文責:北本)